

	INF	REF	こども	電話	メール	中央計	行徳	BM	南行	信篤	平田	駅南	全館計
1月	975	663	732	81	0	2,451	1,766	23	221	172	101	628	5,362
累計	#####	7,422	7,740	1,371	47	26,929	12,608	402	2,199	1,884	1,114	8,918	54,226

INF:インフォメーション・カウンタ REF:レファレンス・カウンタ BM:自動車図書館

## 🔍 今月のレファレンス記録票から

分類	質 問 と 内 容
----	-----------

I/B0 過去にあったという、市川市の聖蹟について知りたい。

『大辞林』第4版(三省堂2019)に、聖蹟とは「① 神聖な遺跡。② 天子に関係ある史跡。天皇行幸の地や旧都趾など。」とあり、市川市公式Webサイトの「市川市の文化財」のページ(<http://www.city.ichikawa.lg.jp/edu09/1111000008.html> 2020.3.21 確認)を見ると、現在、指定されている市川市の史跡に聖蹟にあたるものはないことが分かる。

『文化財の社会史 近現代史と伝統文化の変遷』(森本和男/著 彩流社2010) p.433-480 「第11章 明治天皇聖蹟と国民精神総動員」及び『史跡で読む日本の歴史10 近代の史跡』(鈴木淳/編 吉川弘文館2010)のp.190-210「政治と聖蹟」(川越美穂/著)には、1928年(昭和3年)に史跡名勝天然記念物の保存事業が内務省から文部省に移管された後、聖蹟として明治天皇の行在所、昼餐所、御小休所等を、天皇滞在を象徴するとして史跡指定した経緯が記載されている。また『文化財と社会史』p.728には、1947年に「GHQは文部省に明治天皇聖蹟所在一覧の提出を求め、聖蹟の保存指定解除へ進み出した。」「(1948年)5月20日に文部省で開かれた史跡名勝天然記念物調査会で、明治天皇に関する377件の史跡指定解除が原案どおり可決され、6月29日に官報で告示された。」とあり、明治天皇に関する聖蹟が指定解除されたことが分かる。

『市川市変遷の概略と史蹟について』(市川市教育会/編 京成社1936) p.28-30には、市川市で明治天皇聖蹟として、昭和9(1934)年11月2日、二カ所が指定されたこと、名称及び地番は①市川上出口行在所(市川字上出口3070番地の一部)②市川第六天前行在所(市川第六天前3030番地の1の一部)であることや行幸の日にち等の記載がある。また、国立国会図書館デジタルコレクションの官報検索でも「官報」第2352号昭和9年11月1日に告示があり、第6435号昭和23年6月29日に解除の告示が確認できた。ほかに、『明治天皇行幸年表』(明治天皇聖蹟保存会/編 大行堂出版 昭和8年 国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧可)にも全国の行幸日の記載がある。

市川の指定地は、『千葉県東葛飾郡市川町地番反別地目入図』(日本全国市町村地番入地図刊行会1930)や『市川市全図』(都築庸二/製 市川市役所1935)で地番が確認でき、上出口は現在の市川3丁目、第六天前は市川2丁目であることが分かった。

I/C1 力士の鶴ヶ濱(奈良県出身1893.7.19-1939.1.16)が、市川市で料亭「小松園」を経営していたと聞いた。これは、現在ある料亭「栃木家」のことなのか知りたい。

奈良県葛城市ホームページ内の葛城市出身の力士を紹介するページに、鶴ヶ濱増太郎という人物が掲載されている。その経歴に、「千葉県市川市の料亭「小松園」を経営する。」との記載があった。(<https://www.city.katsuragi.nara.jp/index.cfm/14,18743,41,388,html>2020.3.21 確認)

料亭「小松園」と「栃木家」が同一か否かについては、『市川まちかど博物館』(いちかわ・

まち研究会 1997) の p.110 に、昭和 3 年頃市川市内にあった料亭が「市野家、市柳、一直園、田圃、小松園、鴻の字、松雲閣、北邑、末広、菜の花、丸花、黒松、東華園、栃木家、山水園、鴻月、などなど。」と列挙されており、これをみるかぎり「小松園」と「栃木家」は別の料亭と思われる。また、『松井天山 千葉県市川町鳥瞰図 昭和 3 年』(聚海書林 1989) と、現在のゼンリンの地図を照らし合わせてみても、「小松園」は菅野の国府台女子学院の南にあり、現在もある「栃木家」は昭和 3 年当時と同様に JR 市川駅近く国道 14 号線沿いに位置し、別の場所にあったことが分かる。

さらに、前出の葛城市ホームページの力士紹介文によれば、鶴ヶ濱の角界引退は「大正 15 年 5 月場所後」であり、「小松園」の経営が始まったのは、大正 15 年以降であると推察すると、千葉県公式観光物産サイト ([https://maruchiba.jp/sys/data/index/page/id/e187100\\_ip](https://maruchiba.jp/sys/data/index/page/id/e187100_ip) 2020.3.21 確認) に紹介されている「市川・料亭 栃木家」は、「明治 17 年創業・130 年の歴史」とあることから両者は別の料亭であると考えられる。

#### 490.4 遠藤周作／著の『患者からのささやかな願い』を読みたい。

『遠藤周作文学全集 全 15 巻』(新潮社 1999-2000) に収録なし。国立国会図書館サーチの検索で『週刊読売』1982 年 11 月 21 日号に「緊急連載 遠藤周作の親切医療(最終回) もう一度「患者からのささやかな願い」」が掲載されたことが分かる。ウェブサイト「遠藤周作学会」の年譜のページで 1982 年を確認すると、「四月、自ら持ち込んだ原稿「患者からのささやかな願い」が「読売新聞(夕刊)」に六回にわたって掲載され、そののちの<心あたかな病院運動>へとつながる。」と記載があった。(<http://endo-shusaku.com/nenpu.html> 2020.3. 確認)『読売新聞縮刷版 1982 年 4 月号』 4/1 (木) 夕刊 5 面、4/2 (金) 夕刊 7 面、4/6 (火) 夕刊 7 面、4/7 (木) 夕刊 7 面、4/8 (木) 夕刊 7 面、4/9 (金) 夕刊 7 面に連載が確認できた。上記資料を提供する。また、『心あたかな病院運動』(遠藤周作／著 読売新聞 1986) に収録されていることがわかった。(p.6-17)

#### 539

戦中に日本の核研究・開発に関わった中心人物(科学者)について書かれている本があれば紹介してほしい。また、どのような平和思想を持っていたのか、どんな人柄だったか、などについても知りたい。

日本の核開発の歴史がわかる資料として、『日本の核開発：1939～1955』(山崎正勝／著 績文堂出版 2011) があり、戦中のウラン研究に関わった科学者の様子や、原爆研究の過程、関連資料等が掲載されている。これによると、理化学研究所の仁科芳雄博士が日本の核開発において重要な役割を果たしていたことが分かる。仁科博士は、「当時の科学界の中にあつて、真に国際的な感覚を持った科学者の一人だった」(p.13) とされ、「基礎研究を推進することが、日本の威信のために役立つ」(p.13) と考えていたものの、第二次世界大戦での日本軍の苦戦に伴い「われわれもお国のお役に立つような仕事をしなければならない」(p.28) と、核の研究開発に取り組むようになっていったことが書かれている。原爆投下直後に調査団として広島・長崎に赴いた仁科博士は、1949 年の日本学術会議総会で「日本学術会議は平和を熱愛する。原子爆弾の被害を目撃した我々科学者は、国際情勢の現状にかんがみ、原子力に対する有効なる国際管理の確立を要請する」(p.113) と核の国際管理を目指す声明を出した。

人柄については、前出の資料の他に、『湯川秀樹著作集 7 回想・和歌』(湯川秀樹／著 岩波書店 1989) に収録されている「仁科芳雄先生の思い出」(p.96-100) や「仁科先生と朝永さんと私」(p.101-114)、『科学に魅せられた日本人』(吉原賢二／著 岩波書店 2001) 第 1 部の第 2 話「コペンハーゲンからの贈り物—仁科芳雄とその周辺」(p.47-87) などに記載されている。また、公益財団法人仁科記念財団のホームページで博士の略歴や写真、出版物及び史料研究調査などを見ることができる。(<https://www.nishina-mf.or.jp/jp> 2020.3.21 確認)